

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 24日現在

機関番号：12602

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2012

課題番号：24890067

研究課題名（和文） 臨床実践看護師の教育力向上を目指した教育プログラム開発のための基礎的研究

研究課題名（英文） A fundamental study for development of educational program aimed for improving teaching competency of clinical nurses

研究代表者

大河原 知嘉子 (OKAWARA CHIKAKO)

東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・助教

研究者番号：80632091

研究成果の概要（和文）：

臨床現場で教育的役割を担う看護師に必要な能力として、看護実践力のみならず、教育する上での能力として教育力の重要性を考え、教育的役割を担う看護師の考える教育力の特徴や、その基盤となる教育に対する目標や信念、ロールモデルについて明らかにすることを目的とし、検証した。その結果、対象者は患者へのアウトカムを視野に入れ、指導や教育を行うとともに、教育や看護について一緒に考えることを教育力としていたことが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

As capability required for the nurse who are in a teaching role at their place of work, the importance of teaching competence was considered as educational capability not only in nursing competence. Then the aim of the study is to clarify the characteristics of the teaching competence perceived among the nurses who are in a teaching role and the belief and role model for the education used as the base of teaching competence. As a result, while the candidate put the outcome to the patient into the view and performing instruction and education, having made to consider education and nursing together into teaching competence was suggested.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2012年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：医療・看護

科研費の分科・細目：医歯薬学・基礎看護学

キーワード：教育力、テキストマイニング、臨床実践看護師、ロールモデル、信念

1. 研究開始当初の背景

平成22年度に厚生労働省により、新人

看護職員研修が努力義務化され、研修の場に限らず、継続的な教育の機会と、看護師

の質の高い教育力が求められている。しかし、臨床現場で教育に携わる看護師は、教育学を学んでいないために支えとなる教育的基盤が乏しいと感じ、自己の経験に基づく教育方法への不安を抱えながら看護師育成に携わっている者も少なくない。加えて、看護実践力の高さや臨床経験年数の長さにより、順番に教育的役割を担っているという現状もある。看護実践力の高さは看護師評価の対象になっても、その看護師の指導力や教育への適性が客観的に評価されることは少ない。

これまで臨床現場での指導体制として30年の長きに渡ってプリセプターシップが活用されてきたが、ペアリングがうまくいかない、新卒看護師の指導がプリセプター任せになり、支え切れていないなどの多くの課題が報告され、臨床経験年数の浅い看護師やそれを指導する役割にある看護師を支えるために、教育力のある看護師を育成していくことは急務である。

これらに課題を見出し、申請者はこれまで教育的役割を担う看護師の考える教育力の特徴や、最終学歴との関係について、テキストマイニングや内容分析を用いて明らかにした。その結果、看護師は看護実践経験、臨床現場での指導経験や指導を受けた経験から5つの教育力の特徴を持ち、それとともに教育学や教育手法の知識不足や過去の実践経験に依存した教育を行っていることへの不安、教育についてもっと知る機会がほしいとの希望がある実情も明らかになった。

患者に個別性があるように、看護実践も相対する患者によって異なる。臨床現場で教育的役割を担う看護師は、必ずしも教科書通りではなく、看護実践における「知」を後輩や同僚に教え伝えるという、教育における重要な役割を担っている。そのような看護師が、不安を抱えながらも教育について考えている内容を明らかにし、その関連要因を明確にする中で、看護師自身が気づいていなかった秘められた教育力や、当たり前に行っていた関わりが教育的関わりとして認められることは、現場で働く看護師を後押しすることにつながると考えた。

そこで本研究では、教育的役割を担う看護師が考える教育力がどのような経験や信念をもとに構築されているのかを明らかにすることで、指導者教育の洗練、看護実践者向けの教育プログラム開発の基盤となる示唆を得たいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、臨床実践看護師の教育力向上のための教育プログラム開発を目指し、これまでの成果の普遍性を高めるために対

象を増やし継続して教育的役割を担う看護師の考える教育力の特徴を明らかにするとともに、教育力の特徴を形成する上で、基盤となる教育をする際の目標や信念と、ロールモデルについて明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 対象

臨床経験5年以上で、現在臨床現場で教育的役割を担っている看護師3名とした。年齢や役職は問わなかった。

スノーボールサンプリングにより、教育的に優れていると考える看護師を次の候補者として、調査が終了した対象者に紹介を依頼し、同意が得られた者に調査を実施した。

(2) 調査期間

平成24年10月～平成25年3月

(3) 研究方法

質問紙調査とインタビューガイドに基づく半構成面接調査により行った。質問紙により属性(年齢、臨床経験年数、役職、教育背景など)について調査した。

半構成面接では、(1)今まで出会った教育力のあると考える人の特徴、(2)看護師の教育力の特徴、(3)教育に携わる際の目標や信念の有無やその内容、(4)看護師として教育に携わるうえでのロールモデルの有無やその内容について調査した。

インタビュー内容は、対象者の許可を得てICレコーダーに録音し、録音内容から逐語録を作成した。

(4) 調査環境

面接調査は、プライバシー保護のため、個室を使用し、研究者と対象者のみで行った。また、面接場所は対象者の希望する場所にて行った。面接調査は1回60分程度で行い、業務に支障がないよう対象者の希望に合わせて日時を設定した。

(5) 分析方法

テキストマイニングの手法に基づき分析した。分析には数理システム社のTextMiningStudio4.2を使用した。

(6) 倫理的配慮

研究者の所属大学の倫理委員会の承認および研究実施施設からの実施許可を得た。

研究対象者には、研究の概要、目的、方法、面接内容の録音の実施、個人情報管理、次の被験者の紹介、本研究から予測さ

れる結果、研究協力の任意性と撤回の自由、個人情報保護、研究成果の公表などについての内容説明を紙面および口頭にて事前に行い、書面にて承諾を得た。

なお、面接内容や分析結果は匿名化し、個人が特定されない形にし、外部から切り離されたハードディスクに保存した。データの入ったハードディスクは、鍵のかかる場所で保管管理した。

4. 研究成果

(1) 対象者の概要

対象者3名は全て女性で、20~30歳代であった。看護師としての臨床経験年数は7~10年、現在の役職は全員看護師であった。

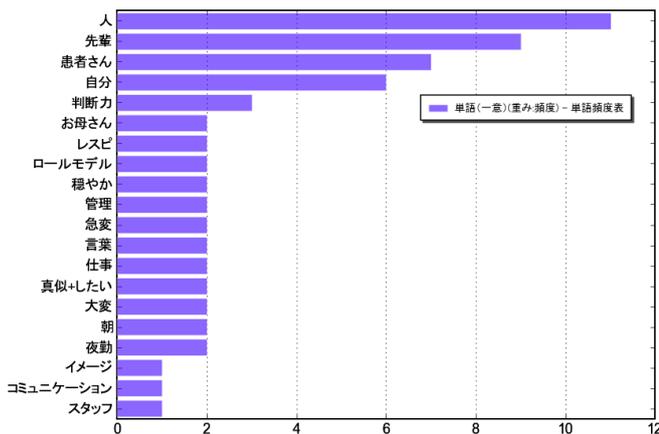
(2) 逐語録の概要

面接内容の逐語録の平均行長(文字数)は98.5文字、延べ単語数は835語、単語種別数は327種であった。

品詞の出現回数は、名詞42回、動詞23回、形容詞4回、副詞8回であった。

(3) ロールモデルに関する分析

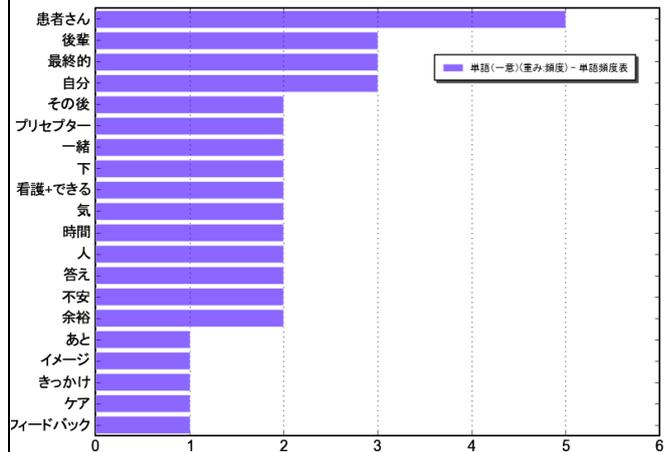
ロールモデルに関する逐語録の単語頻度分析では、「人(4)」(以下単語を「」で、単語頻度を()で示す)が一番多く、続いて「自分、先輩(各3)」、「ロールモデル、患者さん、言葉、真似+したい、判断力(各2)」であった。ロールモデルに関する質問では、イメージする対象である人について語っていることが多いため、人に関する単語が上位になったと考えた。また具体的に経験した場面を語った人が多かったことや、3名と対象者が少なかったため、単語頻度にばらつきが見られたと推察される。



(4) 信念に関する分析

信念に関する逐語録の単語頻度分析では、「患者さん(5)」、続いて「後輩、最終的、自分(各3)」、「その後、プリセプター、一

緒、下、看護+できる、気、時間、人、答え、不安、余裕(各2)」と続いた。単語頻度が上位1位の「患者さん」は、対象者全員の語りに含まれており、『患者さんにとっていい看護を出来るようにする…』『直接患者さんに関わる後輩が患者さんにとっていい看護を出来るようにする方がいい』『最終的には患者さんのためにどうかっていうことをぶれないように…』など、指導や教育する際の判断の基準として、最終的に自分たちにとってではなく、患者にとっていい影響があるかを考えるということを信念として全員が語っていた。



(5) 教育力に関する分析

教育力に関する単語頻度分析では、「教える(12)」が一番多く、続いて「考える(10)」、「一緒、見る、自分、伝える(7)」、「患者さん、凄い(6)」であった。教育力に関する質問であったため、指導や教育場面についての語りが多く、「教える」の頻度が高かった。「考える」「一緒」は、『患者さんのためになることを一緒に考える』『継続的に一緒に考えていく』『みんなで一緒に考える』『いつでも一緒に考えるという姿勢を見せる』など同時に使用されていることが多く、プ

